技術者物語

Vol.8
2020

Touhoku Construction
Engineer Story

東北建設業青年会

会長からのメッセージ

東北建設業青年会 会長
遠藤　康之

建設現場はワンチーム

東日本大震災より9年が経過し、「復興・創生期間」の最終年となり、復興の完遂に向けて官民の総力を挙げ全力を注いでおります。

私たちは、この大震災で得られた教訓が風化しないよう、次の世代に伝承する役割を持っております。

地域建設業は、地域の安全・安心を守る良質な公共構造物の提供・維持・管理に加え、頻発する大規模自然災害等への迅速な対応や緊急初動体制が可能であり、地域を守り支える「地域の守り手」として重要な役割を果たしております。また、社会貢献活動や地域における雇用の創出等「危機管理産業」との認識を持って業務に精励しております。

今年はいよいよ「東京オリンピック・パラリンピック」が開催されます。様々な感動のドラマが生まれ、世界中が歓喜に包まれることでしょう。

建設産業界もアスリートと同様、様々な資格を有する職種の人々が〝ワンチーム〟となって感動のドラマを作り上げ、様々な構造物を地域の安全・安心のための財産として子孫に残す達成感のある産業です。

このため、未来永劫地域の守り手としてその使命を果たせるよう、将来を担う若者や女性の入職定着を促し、人材を確保することが最重要課題であります。加えて、人材確保と生産性向上を推進することが不可欠であります。新たな3K（給料が良い、休日が取れる、希望が持てる）の環境の中で、私たちの仲間になってドローンやICTを活用し、チーム建設で地域貢献をしましょう。

「がんばろう！東北　がんばろう！日本　がんばろう！建設業」

CONTENTS

会長からのメッセージ
東北建設業青年会 会長 遠 藤 康 之 ……01
建設業の主な資格・免許 ……01・02
青森 中 村 有 沙さん ……03
岩手 阿 部 龍 斗さん ……05
宮城 三 浦 健 二さん ……07
秋田 髙 橋 奈美子さん ……09
山形 平 間 菜穂子さん ……11
福島 酒 井 美 優さん ……13

建設業の主な資格・免許

土木工事業　管理系
- 1級土木施工管理技士
- 2級土木施工管理技士

舗装工事業　管理系
- 1～2級舗装施工管理技術者

建築工事業　管理系
- 1～2級建築士
- 1級建築施工管理技士
- 2級建築施工管理技士

型枠大工工事業　技能系
- 1～2級型枠施工技能士

とび・土工工事業　技能系
- 1～2級とび技能士
- 3級とび技能士
- 足場の組み立て等作業主任

切断穿孔工事業　技能系
- コンクリート等切断穿孔技士

コンクリート圧送工事業　技能系
- コンクリート圧送施工技能士（1～2級）

機械土工工事業　技能系
- 1～2級建設機械施工技士

建設揚重業　技能系
- 移動式クレーン運転士

鋼構造物工事業　管理系
- 1～2級鉄骨製作管理技術者
- 建築鉄骨製品検査技術者
- 建築鉄骨超音波検査技術者

鉄筋工事業　技能系
- 1～2級鉄筋施工技能士

左官工事業　技能系
- 1～2級左官技能士
- 3級左官技能士

大工工事業　技能系　管理系
- 1～2級建築大工技能士
- 1級建築施工管理技士
- 2級建築施工管理技士
- 1～2級建築士
- 木造建築士

板金工事業　技能系
- 1～2級建築板金技能士
- 3級建築板金技能士

屋根工事業　技能系
- 1～2級かわらぶき技能士
- 瓦屋根工事技士

塗装工事業　技能系
- 1～2級建築塗装技能士

造園工事業　技能系　管理系
- 1級造園施工管理技士
- 2級造園施工管理技士
- 1～2級造園技能士

技術者物語 Aomori

独自の感性と強固な意志で新風吹き込む〝一人娘〟

中村　有沙さん
Arisa　Nakamura

1995年9月20日生まれ。青森県青森市出身。

株式会社 藤本建設
本社／〒038-0042
青森県青森市大字新城字平岡151-348
TEL.017-788-2411　FAX.017-788-2301
URL　https://www.fujimotok.com

「東京は慌ただしい」就職活動は青森一本 建設業はものづくりが好きでなくてもできる仕事

本編の主人公・中村有沙さんは1995年、真夏の一大イベント〝ねぶた〟が終わり、秋の気配が色濃くなる9月に青森市内で生まれた。両親の愛情を一身に受けた〝一人娘〟は、すくすくと成長。幼い頃は「家にいるより友達と外で遊ぶことが好き」な元気な女の子だったという。地元の小中学校を卒業後、県立青森東高校の普通科に入学。テニス部に入部し、県内屈指の強豪校で、厳しい練習を通じて心身を鍛えた。

部活動の一方で、進学校でもある同校で中村さんが選択したのは理系コース。大学受験に際しては、医療系を志すクラスメイトが多い中「建築は理系の中では文系寄り」という独自の発想で建築系を志望した。「オープンキャンパスに行って雰囲気が良かった」工学院大学に進学し、1～2年は建築学科、選択制の3～4年時にはまちづくり学科に所属。ヨット部にも在籍し、充実した学生生活を過ごした。

大学進学で故郷を発つ際、「地元にはもう帰って来ないだろう」と思っていた中村さんだったが、3年の就職活動時、心境の変化が訪れる。「東京は忙しい。自分ではなく周囲が慌ただしく感じられた」。何気ない思いが決意に変わるまで時間は掛からなかった。「青森に帰ろう」。就職活動は青森一本に絞った。

就職先は「建設会社とは決めていなかった」が、〝とりあえず〟市内の建設会社3社に会社見学を申請。うち1社は経営者が大学の先輩で親しみを感じたものの、最終的には藤本建設に決めた。理由は「会長、社長、建築の常務など多くの人と話ができ、〝ぜひ入ってほしい〟と言われた。その気持ちが嬉しかった」。かくして2018年4月、同社初の女性技術者が誕生した。

望まれた入社でも仕事は甘くない。3カ月の社内勤務を経て最初に配属された現場は『青森市新庁舎』。同社施工では最大規模の建築工事であり、中村さんへの期待の大きさの表れと言える。

当然最初は「何をしていいかわからなかった」し、「先に進むほどわからないことが増えていった」と、ものづくりの奥深さを実感しながらも、物怖じせず現場の先輩や職人さんに「聞き直って話を聞きまくった」ことで少しずつスキルを身に付けていった。

昨年11月に無事竣工を迎え「最初に大きな現場に来られて勉強になった」と振り返りつつ「（市役所工事は）慌ただしいまま終わったので、次の現場では一つずつ理解しながら進んでいきたい」と前を向く。

建設業界に飛び込んで約2年。工事の最盛期には体力的にきつく「正直、もう少し休みがほしい」と感じた。そして自分以上に休まず、出ずっぱりで業務に当たる諸先輩の姿に「こういうことが当たり前になるんだ」と驚いた。この現状が女性の働きにくさにつながっているとも思う。

それでも「何もない場所を掘って、マイナスからのスタートなのに、

上へ上へと上がっていく。その過程が全く想像できなかった。最後に建物が完成した時は感動した」と、大規模建築が形を成していくプロセスを目の当たりにし、その魅力に引きこまれた。

そして、折に触れて〝帰りなよ。〟〝休みなよ。〟と中村さんを気遣い、声を掛けてくれる上司・先輩の配慮が仕事をする上で大きな糧になっているという。

そんな中村さんから寄せられた、未来の業界を担う学生たちへのメッセージは「建設業はものづくりが好きではなくてもできる仕事」。意外な言葉の心は「工種が幅広過ぎて、一つひとつはものづくりと思えない。目の前の仕事をコツコツ積み重ねていける人に向いている」。さらに「最初は何のためにその仕事をしているのか不明だが、一つずつピースがはまり、最終的にすべてがつながってくる。謎がすっきり解けるサスペンスのような魅力もある」とも。

柔和な笑顔の中に意表を突く独特のセンスと揺るがない強固な意志が潜む中村さんが〝ねぶたの街。のインフラ整備に新風を吹き込む。

［ 休日の１日 ］

［ 上司・先輩から一言 ］

常務 杉田　正彦氏

彼女とは就職活動で弊社へ現場見学に来たとき初めて会いました。女性ながら建築に興味を持ち、積極的に現場や仕事の内容を聞き取る姿勢に驚きました。「設計の仕事がしたい」と自分の意志をはっきり言っていたことが印象に残っています。

その後、縁があって弊社に就職が決まり、数カ月の総務研修の後に青森市役所新市庁舎建設工事の現場に配属になりました。現場では電子黒板を使って工事写真撮影と整理、配筋検査のチェックリスト作成など、積極的に仕事をこなしていました。

工事完成後には、1級建築士の資格取得を目指すと宣言し、今は受験に向け猛勉強中です。頑張って取得して今後の仕事に貢献することを期待します。

職場訪問

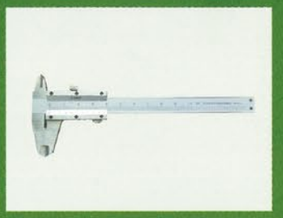
中村さんが昨年11月まで携わっていた『青森市新庁舎』は、延べ床面積が約6900平方㍍の規模で、多岐に渡って建築的な創意工夫が取り入れられた、青森市内屈指の建築プロジェクトだ。

現在は、同じく青森市内にある小学校の児童館新築工事の現場に配属されているが、スケールや働く人の数は違っても、ゼロから建物をつくり上げていく過程は変わらない。「前の工事では新しいことが次々に出てきて振り返ることができなかったので、そこでの経験を生かしたい」。

［ 教えて建設用語！ ］

ノギス

長さを100分の5㎜単位まで精密に測ることができる測定器。外側、内側、深さ、段差の測定ができる。より精密に測れるダイヤル式やデジタル式もある。



技術者物語 Iwate

野球で鍛えた根性とセンス
地域づくりに生かす
若き土木のエース

土木部
阿部　龍斗さん
Ryuto　Abe

1997年8月8日生まれ。岩手県一関市出身。
2級土木施工管理技士

宇部建設 株式会社
本社／〒021-0821
岩手県一関市三関字桜町42-1
TEL.0191-26-5333　FAX.0191-26-4101
URL　https://ube-construction.com/

現場を動かすコミュニケーション力
建設業の「力仕事、汚い」イメージ払拭したい

「建設業のイメージは、力仕事で服が汚れる仕事。そんなイメージを変えていきたい」と語るのは、阿部龍斗さん。入社から4年。地元をこよなく愛し、インフラ整備に携わる日々を送りながら、勤務後や休日はスポーツに汗を流している。

阿部さんは、岩手県花泉町（現一関市）に生まれ育った。父はダンプカーの運転手として、土木工事の現場で働いている。父の背中を見て育ち、ダンプに乗せてもらったことも多いことから「小さいころは、よくダンプの絵を描いていた。『自分も運転手さんになりたい』と言っていたことを覚えている」という。

小学校に入ると、読売ジャイアンツの阿部慎之助選手にあこがれ、野球を始めた。スポーツ少年団時代はピッチャーを務め、中学校の野球部ではセカンドを守った。毎日、泥だらけで練習に励んだ。

高校は当初、普通科に入るつもりだったが、中学の野球部監督から「野球を続けるなら工業高校に行くべきだ」と勧められた。このアドバイスを受けて一関工業高校土木科に入学。土木科を選んだのは、先生から「土木科が公務員の合格率が最も高い」と聞いたからで「正直言って建設業には興味がなく、自衛隊に入ろうと思っていた」と話す。

自衛隊員を志したのは「人の役に立ちたい」というシンプルな理由からだ。中学1年で東日本大震災を経験し、野球部員みんなで沿岸の陸前高田市にゴミ拾いのボランティアに行った。その時に見た自衛隊員の姿が印象に残った。「その時はわからなかったが、今にして思うと建設業の人たちもたくさん作業をしていたと思う」と振り返る。

高校生活も野球漬けの毎日だったこともあり、真剣に進路を考え始めたのは高3の終盤。自衛隊へのあこがれを抱きつつも「やっぱり地元に残って生活したい」との気持ちが勝り、担任の先生に相談したところ、宇部建設を勧められ、見事合格した。

入社後は測量の手伝いからスタート。高校の実習で測量機器を扱ったことはあるが、会社で使っているものはスペックが高く、操作が難しかった。先輩から指導を受けながら、少しずつ測量技術を身に付けていった。

入社から約1年後、下水道工事に携わることになったが、その現場は今までとは少し雰囲気が違った。宇部建設の社員が数人しかおらず、そのほとんどが下請け企業の作業員だった。それまでは会社が直接雇用している作業員が多い現場だったので、わからないことを何でも聞くことができた。

一方、下請けの作業員は知らない人ばかりだ。「新人とは言え、現場を管理する立場の自分が初歩的なことを聞いて良いのだろうか」と消極的になった。ましてや、作業員の多くは父親かそれ以上の年配者ばかりだったため、引っ込み思案になりがちだった。

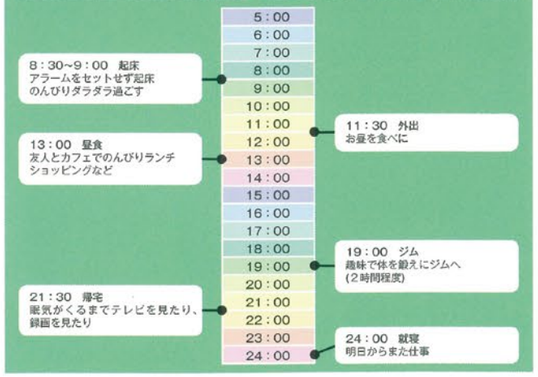
しかし、会社や立場は違っても「工事を工期内に無事に完成させる」という同じ目標に向かって進むチームの仲間。最初こそぎこちなさがあったが、すぐに打ち解け、時にやさしく時に厳しく、さまざまなことを教えてくれた。

「数年たった今でも、その時の作業員さんが『頑張っているか』と声を掛けてくれる。人とのつながり、コミュニケーションの大切さを実感している」。

土木の仕事は朝早くから始まり、夏は炎天下、冬は極寒の中でることもあるが「地域の人たちに『お疲れさま、道路を直してくれてありがとう』と喜んでもらえる。そういう時は素直にうれしい」と顔をほころばせる。

一方で「現場は汚い、服は泥だらけという建設業のイメージを払拭（ふっしょく）したい。きちんと清掃し、身だしなみに気を付ければ良いだけ。誰が見てもきれいだと思われる現場にしたい」と力を込める。宇部社長を始め、会社の先輩たちもルーキーの活躍を大いに期待している。

［休日の１日］



［上司・先輩から一言］

社長 宇部　和彦氏

入社前のエピソードです。入社に関する書類のやりとりをしている場面で、自分のカバンの中から整理された筆記用具を出し、自前のハサミを出して使用していました。マメでキチンとしている印象でしたが、その通り入社当時から比較的何をやらせてもやれる子でした。ですが、もちろん若さゆえ!現場で大胆な失敗をすることも…結構あります(笑)。

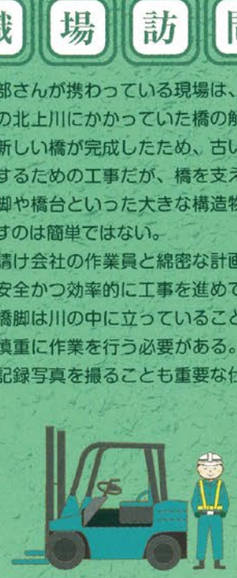
硬式野球部出身ですが、現在は社会人草野球だけでなく、キックボクシングもしています。結構筋が良いらしく、試合に出て勝ってきます(笑)。

4年が過ぎましたが、我が社にも馴染んでくれており、今後の成長と活躍が楽しみな、非常にユニークな存在の若者です。

職場訪問

阿部さんが携わっている現場は、一関市内の北上川にかかっていた橋の解体工事。新しい橋が完成したため、古い橋を撤去するための工事だが、橋を支えていた橋脚や橋台といった大きな構造物を取り壊すのは簡単ではない。

下請け会社の作業員と綿密な計画を立て、安全かつ効率的に工事を進めている。特に橋脚は川の中に立っていることもあり、慎重に作業を行う必要がある。壊す前の記録写真を撮ることも重要な仕事だ。



［教えて建設用語！］

橋台・橋脚

橋台は橋の両端にあって、橋桁などの上部構造を支えている。道路の一般部の土が崩れないようにする壁の役割もある。橋の中間部で上部構造を支えるのが橋脚である。

技術者物語 Miyagi

陸海両現場をこなし 地域の生活支える スーパー技術者

工務課長
三浦　健二さん
Kenji　Miura

1975年2月26日生まれ。宮城県涌谷町出身。
1級土木施工管理技士、採石業務管理者

株式会社 坂口組
本社／〒988-0057
宮城県気仙沼市所沢248-1
TEL.0226-23-7189　FAX.0226-23-7196
URL　http://sakaguchigumi.jp/

〝土木屋〟の使命感で救援ルートを確保 気仙沼の1日も早い復興へ全力尽くす

2011年3月11日、宮城県気仙沼市内の工事現場にいた三浦健二さんを激震が襲った。東日本大震災だ。その後、巨大津波が押し寄せ、多くの尊い命と財産を奪い去った。大きな余震が続いていたが「〝土木屋〟として、できることをしよう」と、救援ルートを確保する道路啓開に取り組んだ。今もなお、震災復興工事に携わる三浦さんは、どのような技術者人生を送ってきたのだろうか。

三浦さんは宮城県北部の涌谷町に生まれ、高校卒業まで過ごした。体を動かすことが大好きで、小学校高学年から少年野球部に入り、中学・高校の6年間はサッカー部に所属した。ポジションは「点の取れないフォワードだった」と照れ笑いする。

高校は涌谷高校の普通科に入学した。高校生のころは建設業への関心が薄く、建築物に多少の興味があった程度。推薦入試で東北学院大学工学部を受けることになったものの、当時は建築学科がなかったため、「まあいいか」という気持ちで土木工学科を選んだ。

大学卒業後は「地元宮城で海洋土木工事に携わりたい」との思いから、石巻市内の海上工事専門会社に就職した。「新入社員にはしばらくの間、作業員と同じ仕事をさせる」という会社の教育方針で肉体労働から社会人生活をスタートし、少しずつ施工管理の仕事も覚えていった。

海の工事は天候だけでなく、潮の干満や波の高さにも左右されるため、夜中しか作業できないこともあった。それでも作業船を使った工事は面白かった。

それから約5年後、大学時代から付き合っていた女性と結婚し、奥さんの実家がある気仙沼市内の坂口組に転職。最初の現場は海上工事で、現場代理人（所長）デビューも果たした。多少の苦労はあったものの、無事に工事を完成させることができ「前の会社での経験が活かせて良かった」と胸をなで下ろした。

しかし、坂口組のメインは道路や河川などの陸上土木工事。当然、三浦さんにも陸上工事の仕事が回ってくる。

「海上工事と陸上工事は、似て非なるもの。測量のやり方を始め、ほとんどーから学び直すことになった」。

そこで三浦さんが思ったのは「大学でもっと真面目に勉強しておけば良かった」ということだ。なぜなら「構造力学や測量など、陸上土木工事に欠かせないことばかり。今は機械でさまざまなことができるが、理論や基礎を理解していないとデータの間違いに気付けない」からだ。

その後、さまざまな現場に携わり、陸海両工事を担当できる技術者となった。

東日本大震災の発生当時は、漁港近くにある土砂のストックヤードで重機作業を見守っていた。最大震度6弱（気仙沼市内）の大きく長い揺れが収まり、周りをみると液状化現象で現場は水浸しになっていた。作業員リーダー（職長）と2人で重機を移動させようとしていたところ、会社から無線で「津波警報が出ている。重機を置いて、すぐに現場から逃げろ」と指示があった。ほどなく巨大津波が来襲し、三陸沿岸地域一帯が壊滅的な被害を受けた。

会社からの適切な指示で避難できた三浦さんは、一度自宅に戻って家族の無事を確認すると「〝土木屋〟として、やるべきことがあるはずだ」との思いが沸き起こり、反射的に体が会社に向いていた。

すぐに取りかかったのは道路啓開。自衛隊や救急隊員、警察などの車両が通行できるよう、がれきを取り除く作業だ。オペレーター数人とチームを組んで、〝一刻も早く〟と道路を広げていった。「みんな無我夢中で、まるで戦争でもやっているような感じだった」と振り返る。

あれから約9年になるが、気仙沼市内では今も復旧・復興工事が進められているだけに「地元建設企業の技術者として、地域の1日も早い復興に貢献したい」と力を込める。

［ 現場の1日 ］

5：00 起床 天候の確認	5：00	
	6：00	6：45 出勤 安全運転
7：10 会社到着 校取りの再確認(5分程度)	7：00	
	8：00	7：35 現場到着 安全運転
8：00 体操・朝礼 会員により体操、作業内容に応じて安全指示 顔色・服装・足元は良いか(声掛け・指差し呼称)	9：00	
	10：00	10：00 現場巡視 朝礼時の指示事項の確認
12：00 昼食 持参のお弁当	11：00	
	12：00	
	13：00	13：00 安全工程打合せ 巡視内容の報告及び指示、次の日の工事内容の確認及び調整
15：00 現場巡視 作業内容、危険箇所の確認	14：00	
	15：00	
	16：00	
	17：00	17：00 作業終了（確認報告） 作業完了の報告より工事内容、工程についての再確認 書類整理開始
20：00 帰宅・夕食 家に帰るまで気を抜かず安全運転	18：00	
	19：00	
	20：00	
	21：00	
	22：00	
	23：00	23：00 就寝 明日も早いので就寝
	24：00	

［ 上司・先輩から一言 ］

専務 小山　涼氏

2002年に入社、港湾工事の経験が豊富で、宮城県の優良工事表彰を受けるなど技術力が高く、粘り強い現場運営手法を信頼しています。また、何事も積極的に取り組む姿勢は他技術者の模範となるものです。

これまでの実績や信頼度の高さから、当社の重要案件を主に任せています。

今後は他の現場担当者を指導し、まとめる役割も果たしてほしいと期待しています。

自己評価が厳しく、常に頑張りすぎるところがあるので、仕事と生活の調和を図りながら働いてほしいと思っています。地域への貢献と会社の発展の為、今後も協力して働いていきましょう。

職場訪問

三浦さんが担当しているのは、宮城県発注の只越川河川外災害復旧工事で、東日本大震災で損壊した堤防をつくり直すものだ。震災前2～3㍍程度だった堤防の高さを9㍍にかさ上げするとともに、数十年から百数十年に一度の頻度で発生する津波に耐えられるよう、堤防をコンクリートで覆って強度を確保する。

GNSS（衛星測位システム）を使った土砂の締め固めなど、ICT建機を採用することで現場の省力化、効率化を図っている。

［ 教えて建設用語！ ］

河川堤防

河川や海の水が侵入しないように、川岸に沿って土砂を盛り上げた構造物。通常は斜面に芝を生やすことで表面の崩落を防ぐが、水流が強くなるところはコンクリートブロックなどで護岸が行われる。

Miyagi

技術者物語 Akita

地元をこよなく愛し
現場と家事に奮闘する
ママさんエンジニア

髙橋　奈美子さん

Namiko　Takahashi

1983年4月14日生まれ。秋田県横手市出身。
1級土木施工管理技士

株式会社 マルサ建設
本社／〒019-0514
秋田県横手市十文字町睦合字川前139-1
TEL.0182-44-3232　FAX.0182-44-3546

遠回りして見つけた天職は土木技術者
負けず嫌いな性格で初の優良工事表彰を受賞

秋田県の建設工事で女性技術者として初めて優良表彰を受賞した髙橋奈美子さん。輝かしい実績の持ち主だが、ここに至るまでは遠回りの連続だった。

髙橋さんは1983年4月、秋田県横手市十文字町で双子姉妹の妹として生まれた。姉の希美子さんとは、学校から習い事まで何をするのも一緒。お互い負けん気が強く、小学校5年生から始めたバスケットボールでもチーム内の良きライバルとして競い合った。

高校も姉とともに湯沢高校に入学した。女子バスケ部がなかったため、弓道部に入部し、ここでも姉と心身を鍛練する日々を送った。

「小さい頃から姉と切磋琢磨し、競い合ってきた日々が何事にも立ち向かえる力となり、今の自分を作り上げていると思う」と髙橋さんは語る。

その後、仙台市内の大学に入学した2人だが、早くから将来の職業を薬剤師と決めていた姉は薬学科に入り、髙橋さんは保育士の資格を取ろうと宮城学院女子大学発達臨床学科（現教育学科幼児教育専攻）に進み、別々の道へと歩み出した。

初めて姉と違う学校での学生生活、キャンパスライフはとても新鮮でアルバイトや友だち付き合いなど、充実な日々を過ごした。勉学にも励み幼稚園教諭1種、保育士免許も取得した。

そんな学生生活を過ごしながらも髙橋さんは「自分が本当にやりたいことは何なのか」と悩み抜いた。「4年間、大学に通わせてくれた両親のためにもしっかりと安定した職業に就きたい」という思いもあった。

建設会社を営む父の背中を見て育ち「自分も何か地域の役に立つ仕事がしたい」との思いが転じて出た結論は女性警官になることだった。

子どもの頃から大好きだったアニメ『名探偵コナン』に登場する佐藤刑事というカッコいい女性への憧れと、父から「人とは違う仕事をしてみたらどうか」とのアドバイスが髙橋さんの背中を押した。

しかし、女性警官の採用人数はどこの県も総じて少なく、狭き門だった。髙橋さんは持ち前の根気強さでがむしゃらに勉強し、見事、栃木県警の合格を勝ち取った。

「地域の役に立つ」という願いはかなったものの「この仕事が地元秋田県での仕事だったら良かったのに」との思いがどんどん大きくなったことに加え「帰郷して母親の事務仕事を手伝ってほしい」という両親の思いもあったことから、約6年間の警察官生活にピリオドを打った。

「栃木県での生活は大変なことも多かったが、たくさんの人との出会い、そして色々なことを学び、人として成長することができた」。

帰郷後は、父が経営するマルサ建設に入社。最初は母が担当している事務を手伝うのがメインだったが、人手が足りないと工事写真を撮ったり、測量の補助をしたりと、少しずつ現場での仕事が増えていった。

現場の仕事を手伝っているうちに、自分が手掛けた構造物が形になっていく喜びや仕事に対するやりがいを感じるようになっていった。

その後、建設技術者に必要な知識を身に付け、1級土木施工管理技士の資格も取得。一昨年、初めて現場代理人（所長）を担当することになった。

これが優良表彰を受賞した防雪柵設置工事。現場に入ったのは、2人目の子どもの出産後わずか2カ月だった。現場代理人としての「自分がしっかりしないと現場が動かない」というプレッシャーに加え、子どもたちの入院や発熱で仕事を休まなければならない時もあったが「現場のみんながサポートしてくれた。大変だったが、工事が完成した時のうれしさは一入（ひとしお）だった」と振り返る。

「子どもの頃、父から『建設業は大地を彫刻し、地図に残る仕事だ』と教えられた。本当にそう思うし、何よりも地域の役に立ち、喜ばれることがうれしい」という。「今後も〝縁の下の力持ち〟として、地域の人たちとのつながりを大切に頑張っていきたい」ときっぱり。

［ 現場の1日 ］

5：00 起床 まだ子供達が寝ている間に洗濯機を回して干す。朝の静かなこの時間の家事が一番捗る。	5：00	6：15 朝食 子供達を起こして朝食を食べさせる。納豆ご飯、味噌汁、ヨーグルト、果物、牛乳は欠かせない。
7：20 出勤 保育園へ出発。子供達はいつも一番乗り！	6：00 7：00 8：00	8：00 現場着 会社へは寄らず、家からいつも現場へ直行させてもらっている。
8：15 作業開始 今日は県の担当者立ち合いのもと、丁張りの設置高さ等の段階確認の日。問題なくいきますように。	9：00 10：00	10：00 休憩 熱中症対策も兼ねて、同僚が持ってきてくれた西瓜をみんなでいただく。いい水分補給だ。
10：15 作業開始 届いた資材の確認を行う。	11：00 12：00	12：00 昼食 昼食は夕食の残り物のお弁当。食後はTverでドラマ鑑賞。家ではゆっくりテレビを観ている時間がないので、この時間が唯一の楽しみだ。
13：00 仕事開始	13：00 14：00	
17：00 現場作業終了　書類づくり 現場作業に終了し、事務所に戻って写真整理、書類作成等を行う。	15：00 16：00	15：00 休憩 現場事務所の冷凍庫にはいつも多種類のアイスをストック。暑い日のアイスは最高に美味しい！
18：45 帰宅・夕食　次の日の夕食作り 子供達には前日に作り置きしておいた夕食を食べさせる。私はいつも立食。帰宅後は台所で作業をしていますことが多いかな。	17：00 18：00 19：00	18：00 仕事終了 子供のお迎えの時間がある為、遅くとも18:15までは上がらせてもらっている。子供達の待つ保育園へ直行。
21：15 子供達を寝かしつける 子供達を寝かしつけ、一緒に仮眠。	20：00 21：00	20：45 入浴 子供達と一緒に入浴。
23：30 就寝 毎日が慌ただしく終わる。今日も一日お疲れ様。	22：00 23：00 24：00	22：00 起きて家事 子供が寝た後で、洗濯物を畳んだり、アイロンがけ、お風呂掃除、子供達の連絡帳を書いて明日の準備。

［ 上司・先輩から一言 ］

主任 阿部　雅俊氏

入社した頃は当社の事務職を行っていた彼女ですが、好奇心旺盛で頑張り屋な性格から本人希望で現場にも出るようになり、今ではさまざまな仕事に携わっています。

現場では負けず嫌いな性格のためか、教えたことをできない時は持ち帰ってじっくり考えたり、自分が納得するまで復習したりと、とても努力家ですぐに自分のものにしてしまうので感心しています。どんな仕事にも挑戦し、「できない」と弱音を吐くことはありません。

プライベートでは家庭を持っていて2人のお子さんがいますが、彼女の持ち前の要領の良さと器用さで両立させているようです。

彼女のおかげで現場は活気にあふれていて、毎日が最高に楽しいです。

職場訪問

高橋さんが所長デビューを果たしたのは、秋田県発注の一般県道野崎十文字線の防雪柵設置工事。冬季の視程障害不良を解消するため、高さ3.5㍍の防雪柵を長さ392㍍にわたって設けた。

道路の幅が狭く、交通量も多い現場だったが、施工方法に工夫を凝らし、工程のフォローアップにより無事故、工期内に工事を完成させた。

女性技術者登用モデル工事として、建設業のイメージアップにも貢献した。

［ 教えて建設用語！ ］

ハンドガイドローラー

建設現場で地面を転圧する（締め固める）時に使われる手押し式の小型ロードローラー。コンパクトなため、狭い道路や砂利・砂などの転圧に適している。

技術者物語 Yamagata

女性ならではの丁寧さと感性で現場を仕切る建築部のホープ

工務本部建築部建築課主任
平間　菜穂子さん
Naoko　Hirama

1992年2月29日生まれ。山形県山形市出身。
2級建築施工管理技士

山形建設 株式会社
本社／〒990-0834
山形県山形市清住町1-2-18
TEL.023-644-5208　FAX.023-644-3957
URL　http://www.yamagatakensetsu.co.jp/

悩みや苦労もあった新人の日々 夢は地域を代表するシンボル建築の所長

100年以上の歴史を持つ山形建設に、久しぶりの女性建築技術者として採用された平間菜穂子さん。入社から6年が過ぎて担当したプロジェクトは7件を数える。現場では慣れた様子で職人さんと打ち合わせる平間さんの姿が見られるが、そこにたどり着くまでには数々の悩みや苦労を乗り越えてきた。

実家は山形市内で材木屋を営む。幼いころから住宅展示場などに出入りしていたため「建設業は身近な存在だった」という。小学校の自由研究では父親の手を借りながら木製の本棚をつくるなど、ものづくりにも慣れ親しみ「漠然と大工さんに憧れを抱いていた」と原点を振り返る。

小学生高学年からマーチングを始め、やがて地元の新体操クラブに所属し、夢中になった。中学校卒業時の進路選択では「工業高校も頭の片隅にはあった」ものの、新体操の強豪校である県立山形北高校を選択。平日はもとより休日も練習に明け暮れる日々を過ごした。

進学に際しては「建築関係の資格取得に必要な履修科目がしっかりしていた」ことが決め手となり、東北工業大学工学部建築学科（仙台市）を選んだ。部活一筋だった高校から一転。「1つも単位は落とせない」と〝ガリ勉〟になったが、そこには高い授業料を払ってくれた親への感謝の気持ちも含まれていた。

ただ、最初の設計課題では「まったくイメージがわかず、センスがないことを痛感した」とも。もともと設計やデザインにはあまり関心がなかったこともあり、「その道を諦めた」と苦笑いする。やがて材料に関心を持ち、3年生後期からは最知研究室に所属。「自分でコンクリートを練っていた」経験がいま、品質管理で大いに役立っている。

就職先は地元の山形県内か大学があった仙台を考えていた。数社の入社試験を受けて最初に内定をもらった山形建設に決めた。入社からの3カ月間は天童事業所で新人研修を受けた。社会人としてのマナー講習に始まり、資材部で建築資材を磨きながら「1つひとつ名前や役割を覚えていった」という。

年齢を重ねて「気が付いた時には、人見知りになっていた」と語る平間さん。こうした性格もあり、初めて配属された現場では「なかなか解け込めなかった」と振り返る。さらに「自分が何をやればいいのかもわからず、辞めたいと思うこともあった」と理想と現実のギャップに苦しんだ。

そのピンチを切り抜けられたのは同じ現場で交通誘導員として仕事をしていたある女性の存在だ。「話し相手として心の支えになってくれた」こともありなんとか踏みとどまり、「いま自分にできることを精いっぱいやろう」と、あいさつに始まり、ごみ拾いや後片付けなど、気が付いたことに率先して取り組むことで、少しずつ周囲からも認められ、現場に打ち解けることができた。

発注者や用途がさまざまな建築の現場を経験し、求められる仕事のレベルも少しずつ高くなり、責任も重くなっていく。「図面通りに収まらない」「職人さんが足りない」など、毎回さまざまな問題に直面しつつも、その都度乗り越えてきた。「失敗してもすぐに相談して、解決することが大事」と切り替えの早さを常に心掛けている。施工管理の仕事で「現場をうまく動かせている時」「工程がしっかり流れている時」には充実感がある。

地元の友人からは「建設業は外仕事で大変なイメージ」と言われたものの、「どの産業や職種であってもそれぞれ役割と責任が求められるという点で、大きな違いはない」ときっぱり。「特に建設業は、入口の敷居が高く見えるけれども、中に入ってしまえばそうでもない」ことを実感した。

会社からは現場代理人（所長）を任されているが、当面の目標は1級建築施工管理技士の取得だ。「いずれは地域を代表する〝シンボル〟のような公共建築で所長を務めたい」と、いつか訪れる日に備えて研さんを重ねる。

［ 現場の１日 ］

	5：00	
6：00 起床 仕事の日は大体この時間に起床	6：00	
	7：00	7：10 現場に到着 作業内容を確認しつつ、お茶を飲む
8：00 朝礼・体操	8：00	
	9：00	
	10：00	10：30 関係業者さんと打合せ
	11：00	
12：00 昼食 食後に仮眠をとる	12：00	
	13：00	13：00 午後の作業開始 職長と作業内容や進捗状況等、打合せ
14：00 図面・書類整理	14：00	
	15：00	
	16：00	
	17：00	17：00 作業終了 現場の見回りをして事務所へ戻る 図面・書類の整理
	18：00	
19：00 帰宅・夕食	19：00	
	20：00	
	21：00	
	22：00	
	23：00	23：00 就寝 テレビや動画を見ながら寝落ち
	24：00	

［ 上司・先輩から一言 ］

建築部次長 區藤　伸郎氏

入社当時から女性技術者のパイオニア的存在として過ごしてきた日々は、同僚には無い辛いこともあったことでしょう。

昨年、数億円規模の新築工事の現場代理人として着任しました。新入社員研修から関わってきた私にとっても感慨深いものがあります。

現場を取り仕切る力は十分に持っており、お客様からの信頼もあり問題から逃げずに解決へと努力する姿は頼もしい限りです。

私は平間さんの成長過程から、女性だから男性だからと論じること自体が無意味であることを学びました。平間さんのこれからの成長を楽しみに見守ろうと思います。

職場訪問

平間さんは現在、山形県天童市内の認定こども園の現場で現場代理人（所長）を務めている。構造・規模は鉄骨造りの２階建て延床面積1236㎡。

現場で気を付けていることは「視野が狭くならないようにすること、全体の動きを把握すること」という。

現場では１つの作業だけでなく、多様な作業が同時に行われるため、所長が前後の作業の動きを調整し、品質や安全を確保する役割を担う。

［ 教えて建設用語！ ］

制震ブレース工法

既存の鉄筋コンクリート建築物の耐震補強用に開発された工法で、摩擦ダンパーと鋼製ブレースなどで構成される。建物の小さな変形から地震エネルギーを効率よく吸収する。

技術者物語 Fukushima

「バックホーが大好き」語り出したら止まらない奥会津の〝建機女子〟

工事部工務課
酒井　美優さん
Miyu　Sakai

1999年4月23日生まれ。福島県会津若松市出身。
車両系建設機械（整地・運搬・積込・掘削）
小型移動式クレーン運転技能講習

大和建設工業 株式会社
本社／〒968-0015
福島県金山町大字西谷字下タ川原542-1
TEL.0241-54-2321　FAX.0241-54-2861

就職難を乗り越えつかんだオペレーターの仕事
重機の操縦はパワフルかつ繊細に

小柄な容姿に不釣り合いな大きなショベルカーの操縦席に乗り込み、お椀型のショベル（バケット）をパワフルかつ精細に操るのは、大和建設工業で建設機械オペレーターを務める酒井美優さん。普段はおとなしめの性格だが、建設重機に関しては「私はバックホーが好きです」と満面の笑みで語り出したら止まらない。

酒井さんは、1999年に福島県会津若松市で生まれた。祖父は大工、父は建築士という家庭に育ち、物心が付く前から建設業は身近な存在だった。

建設業を本格的に志したきっかけは、中学生時代に自宅で建物の設計図を描く父の姿を見て建築に興味を持ったからだ。看護士など女性が活躍する他の仕事に後ろ髪を引かれつつも、地元の県立会津工業高校の建築系の学科に進路を絞った。

その後、勤勉な酒井さんは建築士を目指して学業に専念していたが、高校2年の時にインターンシップで訪れた現場実習が建設機械オペレーターへのターニングポイントになった。建物の解体が進む現場で酒井さんの目に止まったのは、圧倒的に男性が多い建設現場の中で、ダンプカーを運転する一人の女性ドライバーの姿だった。「同じ女性なのに大きなダンプカーを颯爽と操る姿が、何よりも格好良く見えた」とあこがれを抱いた。

これがきっかけとなり、酒井さんの進路は決まった。周囲の誰もが大学に進学して建築を学ぶものと思っていたが、進学から一転して建設機械オペレーターとして建設企業への就職を希望した。

目標が定まってからの行動は早かった。土地が広く、雪も多い酒井さんの地元・会津地域では、生活の足となる自動車の運転免許は高校在学中に取得することが多い。しかし、酒井さんは1日でも早く重機を操作できるようになりたかったため、就職活動に向けて小型バックホーなどの運転が可能となる「車両系建設機械整地運搬（3ﾄﾝ）」や「小型移動式クレーン運転技能講習」などの資格を在学中に優先して取得した。

新たな夢の実現に向けてまい進する酒井さんの前に立ちはだかったのは、女性建設機械オペレーターの求人の少なさだ。昨今、建設業界では女性の活躍推進が叫ばれており、〝女性技術者〟は増加傾向にあるが、女性オペレーターが取り上げられる機会はそれ程多くない。酒井さんの就職活動においても新規高卒者の女性オペレーターを受け入れてくれる企業はなかなか見つからなかった。

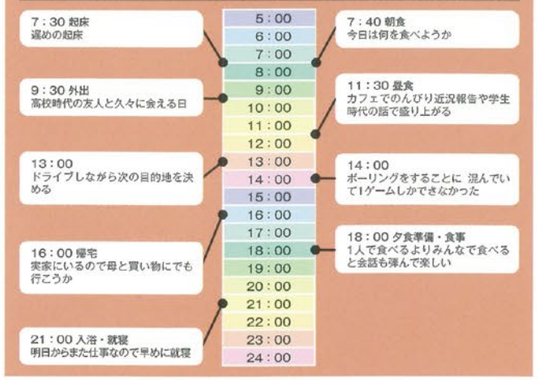
「地元の建設企業にオペレーターとして就職し、生まれ育った地域のために社会貢献がしたい」と諦めずにたくさんの企業の門を叩く中、酒井さんの熱い想いに快く応じ、「ぜひ当社でチャレンジしてみてください」と救いの手を差し伸べたのが奥会津・金山町にある大和建設工業の採用担当者だった。

ただ、同社には女性オペレーターが１人もおらず、さらに実家から会社までの通勤に車で1時間以上かかるため、就職と同時に1人暮らしを始める必要もあった。それでも酒井さんは「オペレーターになれるなら、ほかに選択肢なんてない」と迷うことなく入社を決めた。

こうしてあこがれだった地域建設業のオペレーターに就いて約2年。キャリアは短いものの、電線埋設のための道路掘削や、ダンプへの土砂積み込みなど、日々先輩たちの指導を受けながら仕事に励んでいる。「バックホーは、2本のレバーだけで多彩な動きを行うことができることが楽しい」と機械を手足のように自在に操れるようになるため、操作技術を磨き続けている。

同じ建設業というカテゴリーの中でも、運命的な出会いから全く異なる分野に自ら飛び込んだ酒井さん。その経験を踏まえ、これから建設業を目指す後輩たちには「資格と熱意が大事。女性でも諦めずにチャレンジしてほしい」とエールを送る。

［ 休日の１日 ］



［ 上司・先輩から一言 ］

工事部工務課 栗田　亨氏

酒井さんは元々進学希望でしたが、高２のインターンシップの際に女性のオペレーターさんが現場で活躍されているのを見て「自分もそうなりたい」と明確な目標を持ったそうです。そして高３の夏休みには現場で必要な資格をいくつか取得し、入社してきました。

芯が強く真面目な性格でもあるので上達も早く、また女性ならではの丁寧さも持ち合わせ、入社２年目の今では現場での評判も非常に良いです。

今後もいろんな重機の経験を積み、また技士等の資格取得にも挑戦し、オールマイティに成長してくれるよう期待しております。

職場訪問

酒井さんが担当している現場は、金山町内の道路や1級河川只見川など多岐にわたる。

主にバックホーを操作し、電線を地中に埋めるために土や河川の底に溜まった土砂などをバケットで掘削し、場内に運び出すダンプに積み込むのが役割だ。

重機を使用することで、人力に比べて作業効率は大幅にアップするが、同時に的確な操作が求められることから「心身の健康に気を付け、集中力が切れないようにしている」という。

［ 教えて建設用語！ ］

ショベルカー

地面の掘削や運搬車両への土砂積み込みなどに使われる建設機械の一つ。作業装置は操縦席に近い方からブーム、アーム、バケットと呼ばれており、油圧でこれらを動かす。

Fukushima

発 行　東北建設業青年会
〒980-0824 宮城県仙台市青葉区支倉町2-48（宮城県建設産業会館5階）
TEL 022-263-9271　FAX 022-268-4293
http://www.miyakencenter.or.jp/rengoukai/seinenkai.html